

# 魚と白鳥

小川未明

青空文庫



かわなか、魚が、冬の間にじつとしていました。水が、冷たく、そして、流れが急であつたからであります。水の底は、暗く、陰気でありました。

魚の子供は、長い間、こうして、じつとしてに退屈をしてしまいました。早く、水の中を自由に泳ぎたいものだ、体をもじもじさしていました。

けれど、母親は、よくいい諭したのであります。

「もうすこし辛棒しておいで、じきに春になる。そうすれば、水の上が明るくなって、水もあたたまりますよ。そうなつたら、自由に泳ぐことを許してあげよう。」

子供は、お母さんに、こういわれると、おとなしくしていなければなりません。しかし、それは、元気のいい子供には、なかなか退屈なことであります。

ある日のこと、子供は、急に、頭の上が、赤く、ちらちらするのを見ました。子供は、喜んで躍りあがりました。

「なんという、赤い、明るい光だろう。春になつたのだ！」と叫びました。子供は、すぐにも、その赤い光を慕つていこうとしました。

すると、母親は、あわててそれを止めました。

「おまえ、あれは、月の光でも、太陽の光でもないのだよ。あれを見て、いこうものなら、たいへんなことだ。もう、おまえは、二度と私のところへは帰ってこれない。あの赤いのは、人間が、火をたいているのだよ。そして、私たちをだまして、水の上へ呼び寄せようとしているのです。もし、いつてごらん。人間が、大きな網で、みんなすくつてしまうから……。」と、いいきかせました。

子供は、なんとという怖ろしいことだろうと思いました。じつと、水の底に沈んで、暗い上の方で、一とこほだけが、赤く、電のように、ちらちらと火花を散らしているのを、怖ろしげにながめていました。

「お母さん、春になると、どうなるのですか？」

と、子供は、いいました。

子供は、去年の春、生まれたので、まだ、今年の春にはあわないのであります。すると、母親はいいました。

「春になると、水の上が、一面に明るくなるよ。けっして、あのように、一とこほだけが、赤く、明るくなるというようなことがありません。」と、よく教えました。

子供はそれから、暗い水の底を、お友だちと、あまり遠くへはいかず、泳いでいまし

た。なんといつても、水の底は暗いので、それに、そこばかりにいると飽きてしまつて、早く、自由に、広い世界へ出てみたかったです。

「ほんとうに、早く、春がくるといいな。」

と、子供は、お友だちに向かつていいました。

「春になると、水の上が一面に明るくなるということだから、よくわかるね。」

と、友だちは答えました。

「いつたい、水の上から、上は、どんなところだろうか？ 見たいものだね。」

「水の上へ浮かんで泳ぐと、空というものが見えるそうだ。その空に、太陽も輝けば、

夜になると、月も出るのだということだよ。」と、友だちは、だれからか聞いたことを語り

りました。

ある夜のこと、水の上が一面に明るくなりました。子供は、今度こそ、春になったのだ

と思ひました。そして、友だちといっしょに母の許しも得ずに、勇気を出して、上へ、上

へと浮かんでみました。

「僕たちは空を見よう。」

「月を見ようね。」

こう彼らは、途中、希望に輝く瞳を上に向けて、語り合いました。

みんなは、とうとう上へいって、頭を堅いものに打ちつけてしまいました。

「なんだらうね？」

と、一人が叫びました。

「ああ、わかった。空に、頭をぶつつけたんだ。」

と、友だちの一人はいいました。

「どこに、月があるのだらう……。」

「きつと、どつかに隠れているんだよ。」

みんなは、不思議な空の光に、感心しましたけれど、その光は、寒く、なんとなく

ごかつたのであります。

みんなは、怖ろしくなつて、また、水の底に沈んでしまいました。

「お母さん、もう春になつたんでしよう。あんなに、水の上が明るいもの、僕、みんなと

上へいつたら、空に、頭を打ちつけてしまった。」と、子供はいいました。

すると、母親は笑いました。

「まだ、春にはならないのだよ。そして、頭を打つたのは、空ではありません。空は、そ

それはそれは高いところにあつて、人間でも、そこまではいられないのです。おまえの頭を打つたのは、氷ですよ。あまり寒いので、水の面が氷つていなのです。」といいました。子供は、これを聞くと、がっかりしました。それから、どんなに、春のくるのを待ち遠しく思つたことでしょう。

しかし、ついに、春がやつてきました。

ある夜、頭の上が、いつになく、明るく、青白く見られたのでした。

「とうとうおまえの待つた、春がきました。今夜は、おまえに、お月さまを見せてあげよう。やつと氷が解けたのです。」と、母親はいつて、子供をつれて水の面に浮かびました。

なんという、広い、未知の世界が、水の外にあつたでしょう？

のした空を見ました。円い、やさしい、月の光を見ました。また、遠い、人間の住んでいる森や、林の影などをながめました。そして、お母さんにつれられて、さざなみの立つ、河の水面を、あちら、こちらと泳ぎまわつたのでありました。

「これからは、一日ましに、水の中も、暖かに明るくなつてきます。そして、昼間は、太陽が、河一面に、火を点したように、明るく照らすでしょう。そうなると、おまえは、

じつとしては、いられなくりますよ。けれど、この水の上へ近く出てごらんさい。そこにはおまえの大好きな餌が、たくさんに水の中に浮いています。そして、もし、おまえがそれを食べようものならたいへんだ。おまえは、針に引っかけて、人間のために、水の上へ釣り上げられて、やがて死んでしまうのです。だから、けっして、お母さんといっしょでなければ、水の上へは遊びにこられませぬよ。」と、母親は、いいました。

子供は、なんとという窮屈なことだろうと思いました。

「お母さん、そんなら、私たちは、どんなところで遊んだらいいでしょうか。」と、子供は、母親にたずねました。

母親は、子供を振り向いて、

「人間が、岸では、釣りをしていますから、河の真ん中で遊ぶのですよ。そして、なんでも、ほかのものに、捕らえられそうになったら、できるだけの力を出して、跳ねるので。」と、母親は教えました。

一日ましに、水の中は暖かになりました。そして、もはや、陰気ではなくなり、じつとしてはいられないように、明るい、かがやかしい日がつづいたのです。

子供は、お母さんの許しなどを受けるのをもどかしく思いました。ある日、子供は、ひ



とりで、河の真ん中へ出て、遊んでいました。だんだん、上へ、上へと、太陽のよく当たる方へ、慕って登りました。

なんといううれしい光でしょう。子供は、跳ねたくなりました。走りたくなくなりました。どこまでもいつてしまいたくなくなりました。

太陽の光のさすところ、水の中は、うす青く、平和でありました。子供は、うれしさを我慢していることができなくなつたのであります。

二度、三度、水の面へ白い腹を出して、跳ね上がりました。

ちようど、このとき、どこにいて、狙っていたものか、もう一度、子供が跳ね上がったとき、一羽の白鳥が、巧みに子供をくわえてしまいました。

子供は、驚きました。そして、身をもだえました。しかし、なんのかいもなかつたのであります。

「どうか、私を助けてください。お母さんが、待っています。」と、子供は、水の上を、自分をくわえて飛んでいく、白鳥に向かつて頼みました。

白鳥は、なんで、子供の訴えを聞きいれましよう。子供をくわえて、ある大きな岩の上へ止まりました。そして、魚の子供を岩の上において、いいました。

「もう、おまえは帰ることができない。俺は、おまえを捕らえると、すぐにひとのみにしてしまおうと思つたが、おまえみたいなのは、小さなものをのんだからとて、なにも腹の足しになるものでない。それよりも、俺の子供に食べさせてやりたいために、ここまで持つてきたのだ。」と、情けなくいいました。

子供は、お母さんのいうことをきかなかつたことを、はじめて後悔しました。

白鳥は、岩の上で、自分の子供を呼びました。すると、どこからか、小さな白鳥が、日の光に、雪のように、白い翼を輝かして、飛んできました。

「おまえの大好きな魚を持つてきてやったよ。」と、白鳥の母親は、子供に向かつていいました。

小さな白鳥は、珍しそうに、かわいい、黒い円い目つきで、魚をながめていました。

「さあ、よくかんでお食べ。」と、母親は、小さな白鳥に、注意をしていました。

このとき、魚の子供は、母親が、いつでも、危なかつたときには、できるだけだけの力を出して、跳ねろ！ といったことを、思い出しました。彼はふいに、命かぎりの力を出して、跳ね上がりました。

魚の子供は、岩を飛び越して、水の中へ落ちました。彼はしめたと思うと、すぐに、深

く、深く、水の底に沈んでしまいました。

白鳥は残念がりました。そして、子供の白鳥に、注意が足りないといって、しかりました。小さな白鳥は、ただ驚いて、目をみはっているばかりでした。

しかし、この経験によつて、魚の子供は、りこうになりました。もうけつして、うかつには跳ねられないことを知りました。また、どういうときに、自分は跳ねなければならぬかということ学びました。

小さな白鳥は、はじめて、これによつて、敏捷な、本性を目ざめさせられたのです。こののち、どんなときに、油断をしてはならないかということを知りました。

春もすぎて、夏のころには、魚の子供は、もう、大きくなりました。やがて、お母さんになりました。小さな白鳥も、大きくなりました。そして、魚は、水の中を気ままに、泳ぎまわり、白鳥は、空を、自由に翔けていたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦ 講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「童話」

1924（大正13）年3月

※表題は底本では、「魚《うお》と白鳥《はくちよう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 魚と白鳥

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>